
何が原因！？

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何が原因！？

【Nコード】

N 6 6 2 4 B

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

水瀬がクラスメートと急接近！？綾乃がついに牙を剥く！シリーズ初期の作品です。

第一話

エピソード その夜の出来事

水瀬は、布団を頭から被って震えていた。

ある災厄が訪れないことを祈りながら――。

大丈夫、大丈夫だから――。

ガチガチ震える歯に苦労しながら、自分に言い聞かせるように、何度も「大丈夫」を口にするが、震えは収まるうとはしない。

何が大丈夫かわかんないけど、とにかく大丈夫なんだから――

神社と周辺に仕掛けられた科学的セキュリティと迎撃システム（特殊部隊数個小隊程度なら余裕で迎撃可能）は、ついさっき、すべて、完全に、破壊された。

霊的防衛システムも破られるのは時間の問題だろう。

そして――

バキィッ！

ドズンッ！

カギが引きちぎられ、ドアが蹴り破られる音が家中に響く。

来た――。

一步一步、怪獣でも歩いているのかと疑いたくなるような足音がこちらにやってくる。

ついに、部屋の前に来た。

障子越しに浮かび上がる姿を見た途端、夜叉が女神に思えてきた。

「悠理君――」

地獄の閻魔様だってもっとカワイイ声を出すだろう程の音が、障子を揺るがす。

「――!!――」

「ここを開けてください――開けてくれないなら――」

あとはつつかえ棒、そして「施錠」の魔法だけが頼りだが、それすら無意味であることを、水瀬はどこかで理解していた。

「破りますよ?」

――水瀬は、死を覚悟した。

10日ばかり前のことだ。

「水瀬が最近、瀬戸綾乃と仲がいい」

そんなウワサが出たのは、ここ最近のことだ。

確かに、綾乃が自発的に、しかも親しく声をかける男子生徒なんて、水瀬以外にはいないし、休み時間も、女子生徒以外で一番側にいるのは、いつも水瀬だ。

綾乃によると、水瀬は幼なじみなのだというが、綾乃の接し方は、誰の目にもそれ以上の意味を感じ取れた。

故にもし、水瀬が普通以上の外見のオトコだったら、周囲の狂信的綾乃ファンが水瀬を生かしてはおかないだろう。

「ムカついたから刺した」位のことは平然と言つてのける連中が、周囲にはゴロゴロいるのだから。

しかし、男子生徒がともに水瀬・綾乃カップル説を信じようとしない理由は、一重に水瀬の特異なキャラクターにあった。

魔法騎士云々以前に、水瀬は決して「普通」ですらなかった。

その外見はオトコらしいとか、かっこいいという言葉からはほど遠く、行動も言動も学園で一番浮世離れた、いわば「変人」だ。

だから、二人のウワサを聞いた草薙などは「お姫様とピ。チュウの恋愛話や」と笑った位――。

つまり、どうみても釣り合いがとれない。

男子生徒は、内心で焦りを感じながらも、表面上は平静を保ちつづけた。

そうはいかないのが女子生徒達。

女子生徒達にとって、水瀬は「よくて弟、悪くてマスコット」(羽山浩一談)と言われている。

お気に入りのオモチャが綾乃に独占されるようで面白くない。と感じる女子生徒は、決して少なくはなかったのだ。

その二人がWデートというのが、今回のお話。

「遊園地？」

綾乃と美奈子が教室で昼食をとっている所へ、チケット片手に現れたのは、クラスのお笑い担当、品田浩二だった。

「そや。アトラクション一新した後やから楽しめるで？」

「——だそうだけど、私を誘ってるってわけじゃなさそうね」
ちらりと綾乃を見る美奈子。

「い、いやいや違うで！やましいトコなんてナイ！見てみい！この真剣な目を！」

ぐいっと顔を近づけてくる浩二を、胡散臭いという眼差しで一瞥する美奈子。

「魚河岸に並んでたら鮮度疑うわ」

「ワイは腐つとるんか！」

そんなふたりのやりとりをクスクス笑いながら見ている綾乃——
|。

「どや！？確か綾乃ちゃん、明日はオフやる！？」

鼻息も荒く綾乃に迫る品田。

「うーん。そうね。いいですよ？」

「ホンマか!？」

「ええ。でも」

そのセリフに、品田はがっくりと肩を落とした。

「せつかくですから、美奈子ちゃんや悠理君も一緒に行きましよう?みんなの方が絶対楽しいもの」

凶悪なまでの笑顔を前に、何一つ反論することもできず、浩二はただ、頷くだけだった。

「あー。はいはい。じゃ、水瀬にはワイの方から話しく」

「お願いします。美奈子ちゃんは、明日はどうですか?」

「いいわよ?全額、品田君のおごりらしいから」

「なんでやねん!」

涙ながらのツツコミを無視した美奈子が言い切った。

「デートで女の子にお金払わせるなんて、最低よねえ。ね?綾乃ちゃん?」

「え、ええ、た、多分……」

どよんとした黒雲を頭に作った浩二に出来ることは、涙ながらに頷くだけ。

くっそお!

浩二は水瀬を捜して校内をうろつきながら思う。

桜井のアマ、シヨタコンのクセしてナマいいやがって。いつか絶対、キヤーンいわせたらあ!

そういうシーン(- 自主規制 -)を連想し、

——それも、いいかなあ。

と、鼻の下を伸ばし歩き続ける浩二は、誰の目から見ても変人というか、変態そのものだった。

変態として校内をさまよい、生活指導の先生に怒鳴られた後、教室の前でようやく浩二は水瀬を見つけた。
なるせ・さやか
図書委員の鳴瀬清花と一緒にだった。

水瀬とは何か熱心に話しながら歩いているようだが、浩二には一切関係ない。

「おい水瀬！」

ぐいつ　と水瀬の肩に腕を回し、スリーパーホールドの要領で首を絞める品田と、突然のことに驚く水瀬。

「なっ、何!?!」

「よろこべ。デートや」

「デート?」

「そや。明日9時、駅前集合や。ええな!遅れたらシバくで!」

「あ。あの、品田君?」

「なんや?」

「あのね?デートって、何するの?」

「……女の子の護衛や」

桜井美奈子の日記より

○月凸凹日(土曜日・晴れ)

昨日、品田君が遊園地に行こうと言い出した。

品田君のお目当ては瀬戸さんだろうし、私が品田君にデート費用全額負担を認めさせたのは当然のことだ。

で、今日、デート当日。

天気は快晴。

待ち合わせ場所には、水瀬君と瀬戸さんは時間より少し早めに来

ていて、何か話し込んでいた。

水瀬君は春物のシャツにジーンズの上からウィンドブレーカーを羽織り、リュックに大きめのキャスケット帽姿。お嬢様然とした瀬戸さんの姿とセットで園児と保護者。そこまでいったら言い過ぎかな？

私が来たら話すのをやめたので、何話していたのかは不明のまま。でも、遠目に見てもこの二人、結構いい感じじゃないかな。

品田君は10分遅刻。

「おめかししてて時間かかった」といいはったが、あたまに寝癖がついていたのを私は見逃さなかった。

遊園地はアトラクションが一新されただけあって結構楽しめた。

瀬戸さんも品田君も楽しんでたようだけど、水瀬君は珍しがり。はしても、どっちかというと、楽しんでいるというより、何となく本当に何となく、周辺を警戒しているという素振りだった。

水瀬君は遊園地そのものに来るのが初めてだという。今時、そんな子がいるとは思えなかったけど、本人がいうからには間違いないんだろう。

そのときは、珍しすぎて緊張しているのかな？とか勝手に思っていた。

瀬戸さんはライド系は苦手らしく、しきりに品田君が誘っても断り続けたし、水瀬君も私達の側から離れるのを嫌がった。

「しゃあない。水瀬、ついてこい」

「やだ」

「おまえ、怖いんか!？」

「あそこじゃ、護衛が出来ないよ」
護衛？

品田君があわてて水瀬君の口をふさいでいたけど、それで全部わかった。

水瀬君は、私達の護衛つていわれてここに来たんだ。

そう。品田君、絶対、水瀬君にウソついている。
後でバレてどうなっても知らないからね。

私は品田君がこの後、どう動くか知りたくて、ウソの件は知らんぷりしていたが、お昼を食べる頃になって風が吹き出してから流れが変わった。

「風が少し寒いわね」

ワンビースにボレロといういかにもお嬢様風の装いの瀬戸さんがぼつりとそうつぶやいたのを水瀬君が聞いて、

「じゃ、これ、貸してあげる」

と、自分のウィンドブレーカーを瀬戸さんに渡して移動する段階になってからだ。

よくみると、水瀬君もかなり仕立てのいいものを身につけている。やっぱり育ちなのかな。

少し前を歩く水瀬君の後ろ姿を見た瀬戸さん（なんだか少しうれしそう）が、水瀬君に声をかけた。

「悠理君」

「何？」

「腰に何をつけているの？」

私も気にはなった。

水瀬君の腰から下げられた3・40センチ位の金属の2本の棒みたいな物。

白い象牙みたいな素材に金の飾りが綺麗だった。

「あつ。気にしないで」

水瀬君は慌ててリュックにしまおうとするけど、言われて気にならないはずはない。

「あのね。水瀬君。そういうのって、気にしてくださいっていつてるのと同じなのよ」

と私が釘を指すと、水瀬君はしぶしぶという感じで一本を腰からとって言った。

「れいはって、知ってる？」

誰も知らなかった。

「えっと、サイコ・ブレードともいうんだけど、要するに、魔法騎士専用のカタナ」

水瀬君、武器まで持ってきていたとは……。

「どうして、遊園地に武器なんか……」

瀬戸さんもこの時点で思い当たる節があつたらしく、冷やかな目（瀬戸さんもこんな目が出来たんだ！）でにらむ先には、必死にとぼけた顔をする品田君の姿が……。

「……ごめんね……えっと、気分、悪くした？」

水瀬君、私達が気分を悪くしたと思つたらしく、しょぼんとしてしまった。

このとき、私はこの前の瀬戸さんの言葉を思い出した。

水瀬君にとって、魔法騎士としての何かを他人に見られるということは、単なる水瀬君という存在とはかけ離れた所で評価されてしまうことになる。

それは、単なる人間じゃなくて、兵器として見られるということだ。

そんなの、普通じゃない。目の前にいるのは機械じゃない。

だから、このままじゃ、いけない。私は水瀬君の友達だもんね。

「大丈夫。今日、そんなもの必要ないわよ」と私がいうと、瀬戸さんも

「そうです。せつかなんですから、楽しみましょ？」

「でも……」

水瀬君、まだ、自分が護衛で呼ばれたはずだと信じているらしい。

「いざという時、護衛は頼むけど、それまでは一緒に楽しんでほしいな」

という私の一言に、水瀬君もようやく安堵のため息をついた。

「……うん」

少し、水瀬君が笑った気がした。

「じゃ、行こ」

と、水瀬君は品田君の背を軽くたたいたただけなのに、品田君は空中に持ち上げられる格好で尻餅ついていた。

水瀬君なりの報復、ってトコかな。

この後、私達は本気で遊び倒した。

オバケ屋敷でオトコらしい所をみせようとした品田君は、実はオバケが怖いらしくて、後から入ったくせに私達を追い抜いて出口まで逃げていったけど。

水瀬君は水瀬君で、初めて来る遊園地に興味津々のはずなのに、私達の存在を忘れることはなかった。

本当は、今日一番はしゃいでいたのは水瀬君。

でも、ジェットコースターに乗りたいたはずなのに、瀬戸さんが苦手という理由であっさりあきらめてくれたし、私達が楽しい時間が過ぎせるようにと、いろいろしてくれた。

やっぱり、水瀬君って優しいし、しっかりしてるし……って、私、何書いてるんだらう。

ちなみにこの日のデート代は、全額品田君持ち。なんか泣いていたけど、無視無視。

肝心の品田君、この水瀬君へのウソで瀬戸さんの好感度を一気にダウン。

さすがに育ちというか、逆に水瀬君は私達をきちんとエスコートしてくれたので好感度アップ確実……かな。

第二話

デートから数日後のことだ。

美奈子は水瀬の素振りがおかしいことに気づいた。

綾乃の登校日にはほとんど側にいるはずの水瀬が、何故かいない。

かと思えば、いつも以上にブーツとしているコトも多い――。

「悠理君、どうしたんでしょうか？」

放課後、図書館にむかう途中、不意に綾乃が美奈子に言った。

「最近、あんまり顔を見ないんですけど……」

「んー。季節の変わり目だから？」

「――体調、おかしくしたんですか？」

「アタマがおかしいのは今に始まったことじゃないんだけどねえ」

図書館に入った二人が絶句したのは、ある女の子と親しげに話す水瀬の姿があったからだ。

一冊の本を前に、並んで座り、女の子と楽しげに話す水瀬。

美奈子がちらりと横を向くと、何でもないという顔の綾乃が、踵を返して図書館から出て行くところだった。

「ち、ちよつと瀬戸さん？」

「用事を思い出しました。これで帰ります」

歩調を早めて、下駄箱に向かう綾乃の姿を、美奈子はただ、呆然

として見送るしかなかった。

翌朝 -

綾乃は、ちらちらと水瀬を見つめては、朝からため息をついていた。

そんな綾乃にまるで気づかない水瀬は、反対に誰かを待っているようだった。

「あ。鳴瀬さん」

教室に入ってきた図書委員に近寄った水瀬が、二言三言告げる。

相手は

なるせ・さやか

鳴瀬清花 -。

普通科コース在学。クラスの図書委員と目立つところがない、いわばごく普通の子。

神社の娘で、腰まで伸ばしたロングのストレートヘアをリボンでまとめた上にメガネという、清楚で古風なタイプだ。

「あ。おはよう水瀬君。どう？」

「うーん。やっぱりヒントちょうだい？」

「ダメ。自分で解くって言ったのは水瀬君ですからね？」

「ううっ。……けち」

「瀬戸さん。大丈夫？」

そんなやりとりをニコニコと見つめる綾乃に、そっと耳打ちする美奈子。

「水瀬君、お友達が増えたみたいですね」

口調こそ楽しげだが、手にしたシャープペンシルにはヒビが入っていたのを、美奈子は見逃さなかった。

（……瀬戸さん、まさか）

昼食

クラスでキョロキョロしているのは綾乃だった。
手には二人分の弁当箱がある。

「悠理君、どこ行つたのかしら？」

「さつき、鳴瀬さんと一緒にいるの、見たぞ？」綾乃の横の席の
羽山がそう言った。

「鳴瀬さんと？」

「ああ。最近、二人でいることが多いな。あいつら
……」

その日、綾乃は昼食を食べなかった。

放課後

「あ、水瀬君」

美奈子が帰ろうとする水瀬に声をかけた。

「今からみんなでマツクにでも行こうかって思っただけど」

「ごめん。鳴瀬さんと約束があるから」

水瀬はそう言って、いそいそと教室を出て行った。

ビギッ

妙な音が教室中に響き渡ったのは、その瞬間だった。

驚いて振り返った美奈子がみたものは、

「あらいけない」

引きちぎられた革製のペンケースの残骸を、カバンにしまう綾乃

の姿だった。

どうやら、美奈子の予感は的中したらしい。

「瀬戸さんが？」

「うん。多分、だけどね」

美奈子は、綾乃が席を外した後、居残っていた学級委員長、森村有希子と話し込んでいた。

冷静沈着、スーツでも着せればやり手のキャリアウーマンで通りそうな有希子は、美奈子の口から出た意外な言葉に、正直、驚いていた。

「でもさ。瀬戸さん、そんなに鈍いと思えないけどなあ」

「そりゃ、私だってそう思いたいけど」

「あんたの勘違いじゃない？瀬戸さんがヤキモチやいてるなんて」「でなきゃ、説明付かないもん」

「しかも、自分がヤキモチやいてることに、瀬戸さんが自覚してないなんて、信じろっていう方が無理」

「うーん」

確かに、綾乃は真面目な性格、つまりはマトモであることを売りにしている。だからこそ、そこまでニブいなんて普通は信じられなくて当たり前だ。

それはわかる。

だが、それでは綾乃の素振りの説明が出来ない。

席に戻ってきた綾乃を遠巻きに見る美奈子達だが、それはどう見

ても普段通りの綾乃だ。

「ねえ、水瀬君てさ。」

別の女子生徒達の群れから、そんな言葉が聞こえてきた。

カバンに学用品を詰める手を止める綾乃。

「あっちの方ってどうなのかなあ？」

「見た目、かなりお子ちゃまだけどさ、ああいうのがスゴいって聞いたよ？」

「……」

瞬き一つせず、一言たりとも聞き逃すまいとする綾乃の耳は、すでにダンボになっていた。

「水瀬君ってさ。経験あるのかなあ？」

「あ、それ、すごく気になる！」

「なんか、ウワサだとさ。あるらしけど」

「えーっ！？相手誰！？」

「……」

メキメキメキ。

綾乃に掴まれた牛革製の学生鞆が音を立ててへしゃげていく。

K。ファイターも真っ青の握力というか、とてもではないが、アイドルのすることではない。

「……これでも否定する？」

その光景に思いつきりひきながら、美奈子是有希子に訊ねた。

「否定、できないわね……」

高田神社

午後9時

水瀬が帰った後、清花は倉の片づけを手伝わされていた。

「いい子だな。悠理君は」

棚から箱を下ろしながら、清花の父は満足そうにいった。

「うん」

「さすがに水瀬家の跡取りだ」

ちらりと清花を見た後、父は呟くように言った。

「本当はお前には悠理君の所に嫁いでもらいたかったがなあ」

ガチャンツ！！

唐突な発言に、清花は手にしていた巻物の束を落としてしまった。

「お、お父さん！？」

顔を真っ赤にして振り向く清花。

「水瀬家は名門だぞ？神社の格式もうちとは比較にならん。財力も権力もある。そこと血縁になれるんだ。そんなに悪い話じゃないだろう」

「思いつきり政略結婚な気が……」

「なにより、お前だって悪いって顔はしてないぞ？」

「もうっ！知らない！」

父親の笑い声を見捨て、ちらばった巻物を一つ一つ集める清花だが、最後の一つを手にして、動きを止めた。

「お父さん」

「ん？」

「これって、封印の呪符じゃない？」

巻物に張り付いていたのは、古ぼけて判断がつきづらいが、魔物封じの符だ。

「ああ。本当だ。こんなところになんで……何？うーん。文字が
かすれてわからないなあ——」

巻物を手にした父親が、巻物を照明に照らし出して固まった。
封印は、破れていた。

第三話

トップアイドル殿のご機嫌は朝からすこぶるよろしくない。

理由は簡単。

一つ、水瀬が鳴瀬青花の家で、この所毎晩夕ご飯を食べていることを知ったこと。

二つ、その二人が、目の前で話し込んでいること。

三つ、半泣きの青花を、水瀬が綾乃に見せたことがないほどの優しい態度で慰めていること。

四つ、水瀬の手が青花の肩を抱いていること。

なにより、水瀬が綾乃の不機嫌さに全く関心を払わないから。

「あの、瀬戸さん？」

ものすごく言いづらい、というか、怖くて周りが声をかけられないことから、やむを得ず隣の席の羽山が、美奈子に押される形で綾乃に声をかけた。

ギリ

そんな効果音が入りそうな鋭い眼光に睨まれ、羽山も一瞬たじろいだが、思い直して声をかけた。

「なんだかよくわからないが、そう殺気立たない方がいいぞ？ フアンが減る」

「——意味がよくわかりません。私、普通ですよ？」

「……普通の子が、スチール缶握りつぶすようなマネするかよ」

綾乃が手にしていた紅茶の缶は、綾乃の手の中で原型がわからないほどひしゃげていた。

「あら、いけない」

「——— tactics」

羽山も水瀬の方をちらと見て言った。

「あいつら、なんか裏がありそうだな」

「そう思います？」

「ああ。なんか、鳴瀬が相当困っているみたいだな。聞いてみたらどうだ？ 女の子同士、手助けも出来るんじゃないか？」

「はい。何があったのか、手始めに、まず悠理君を拷問して——

——

「は、はあ？」

「——— じゃなくて、それとなく聞いてみることにします。ええ、それとなく」

クッククック——

「なんか、今、かなりヤバめなセリフが聞こえた気が——」

「気のせいです」

さつきまでの殺気はどこへやら、数百万のファンを魅了する満面の笑みを浮かべて否定する綾乃に、羽山は黙って席にもどった。

下手にかかわると命がヤバい。

羽山のカンはそう言っていた。

さて、肝心の水瀬達だが——

「——ふうん。封印が、ねえ」

「私、なんてことしちゃったんだろうって」

心配して近づいてきた友達に励まされつつも、清花は泣き出すのを我慢するのがやっと。

きっかけさえあれば、声を上げて泣きたい心境だった。

「でもさ。鳴瀬さんが封印を破ったって証拠にはならないじゃない。もしかしたら、もうとくに封印が破けていたコトだって十分ありえるわけで——」

「……そう、思いたい。でも、でも不安で——」

「うーん」

水瀬は、少し考えた後で言った。

「じゃ、まずはその巻物を見せて。手がかりがあるかもしれない。すべてはそこから。今日の勤めが終わったらすぐでいい？」

「ありがとう！」

涙目であつても、ようやく清花の顔に笑顔が浮かぶ。

「家での仕事が終わったらすぐに行く」

「待ってるわ！じゃ、お礼にご飯は腕ふるうから！」

「——ありがとう」

「なんだよ。あれじゃ新婚夫婦の会話だぜ？腕ふるったご飯かよ。誤解招くよな、ありや。なあ——」

羽山は苦笑混じりに綾乃をちらりと見て、見たことを心底後悔した。

顔こそ笑みを浮かべているが、羽山の目には牙と角が生えて見えただからだ。

「——悠理君、逝く気満々ですね」

「……字が違つて。っーか、瀬戸さん」

「何です？」

「ヤキモチ焼くなら、もっと素直に焼いた方がいいぜ？あのニブちん、てんでわかってない」

「なっ——！！」

教師が入ってきたため、綾乃はそれ以上の反応を差し控えた。

「ヤキモチ焼くなら、もっと素直に焼いたほうがいいぜ？」

私、やきもちなんて焼いていない。

——うん。きっとそうだ。

でも、なんで私、悠理君が他の女の子と話しているのを見ただけで、こんなに腹立たしく思うんだろう。

わからないからかもしれない。

不思議と、羽山の言葉が綾乃の頭を離れなかった。

お昼

綾乃の機嫌は上々だった。

綾乃、水瀬、美奈子の三人で久々の食事がとれたから。

会話も花が咲き、朝までの気分を綾乃はすっかり忘れていた。

「やつほお！美奈子ちゃん！」

「きゃっ！」

水瀬手作りのお茶とデザートを食べている時、美奈子に後ろから抱きついてきたのは未亜だった。

「ねねねね。聞いた聞いた？深泥沼の話！」

「はあ？怪談話にはまだ早いわよ？」

「深泥沼って、高田神社の近くのこと？」

「そう！あ、水瀬君、鳴瀬さんとの半同棲生活についてあとで聞くから逃げないでね」

「……へ？」

「昨日ね、沼で死体が上がったんだって」

「同棲って、何？」

「一緒に住むってこと。未亜、死体があがったって？」

「そ。でね？ 昨晚、女の亡霊に襲われたって近くの交番に飛び込んできた人がいてね、駆けつけた警官がさ。すごい悲鳴聞いたんだって」

「僕が鳴瀬さんと暮らしているってこと？」

「調べてみたら死体があがったってこと？ うーん、ちょっと不純なニュアンスで暮らしているってことからね」

「そそそ。その時は何も見つからなかったんだけど、今朝になってもう一度調べたら出てきたって」

「不純なニュアンスって、何？」

「犠牲者、不純異性交遊に近い意味」

「うん。なんか浮浪者らしいけど。死体、すごいことになってたらしいよ？」

「不純異性交遊って、何？」

「すごいこと、って？ おこちゃまにはわかんないこと」

「犠牲者で、すごいことで—— お子ちゃまって僕のことかな。僕にはわかんないことなの？」

「あーもうっ！ 二人して同時に声かけてくるなっ！ ワケわかんなくなってきたじゃない！」

「だつてえ」

「わかんないんだもん」

「じゃ、まず水瀬君、鳴瀬さん家には何しにいつているの？」

「今度の夏祭りの準備。鳴瀬さんと二人で舞やるから。その練習」

「夏祭り？ かなり先じゃない」

「舞とかの準備は今くらいからだよ。僕も三幕やるし」

「出来るの？」

「うん。長野じゃよくやってた——でも」
「でも？」

「ヘンなんだよ？僕、なんで巫女装束で舞をやらされるんだろう」

放課後 明光学園某所

誰にいない部屋の中、テーブルをはさんで座る二人の女性がいた。

「えー？面倒くさいよお」

「——どうしても、引き受けてくれませんか？」

「うん。あのね？近くににいるから、逆に気づかないかもしれないな
いんだけどさあ。かなり警戒厳しいんだよねえ……」

「これでも？」

ポンツとテーブルの上に置かれたのは、銀行の封が切られていない
一万円札の束——。

「わ、わわわわっ！——」

女の目の色が変わり、手が札束に届く一歩手前で、出した方の女
の手がそれをさらう。

「あくまで成功報酬です。しくじつたらないものと思ってくださ
い」

「おっけーっ！ま、この未亜ちゃんに任せてよ！ね？綾乃ちゃん」

「はい（＾＾）」

高田神社社務所

「うゝん」

「ど、どう？」

広げられた巻物を前に、水瀬がうなる。

巻物を夾んで、向かいにはそれを心配そうに見つめる清花と、その父、そして、何故か側に未亜がいた。

「……確かに封印だね。こりゃ、ちよつと厄介だね……」

「どういうこと？」

「巻物に残っている魔素はかなり強いから、かなりの妖魔か魔族が封印されていたのは確かなんだけど、でも、この感覚、何かひっかかるんだ」

「じ、じゃあやつぱり」

「鳴瀬さんの失敗じゃないよ。封印は劣化ひどすぎるから、放っておいても、いずれダメになるのは時間の問題。むしろ、封印されていたモノが突然暴れ出すとか、そういうことにならなかったことを喜んだ方がいい」

「……」

「そうだね。清花ちゃんは、単に時間を早めただけってことでしょ？」

「そゆこと」

「で、でも、きつかけになっちゃったのは私なんだし。私に何か出来ることがあれば」

「うん。鳴瀬さん、確か図書委員だよね？じゃ、調べてほしいことがあるんだ」

「え。ええ！調べ物は得意だから！」

「この妖魔、牛鬼っていうらしいんだけど……どんなヤツか調べて」

「牛鬼？」

顔を見合わせる鳴瀬親子だが――。

「それならすぐわかるわ」と清花。

「へ？」

「あのね？ウチのご先祖様」

「……」

今度は思わず顔を見合わせたのが水瀬と未亜。

「……あの」

「どういう、こと？」

「あ、うちってね？元は京都の奥、貴船ってわかるかな。貴船神社。あそこの社家の血をひいててね。元々は「舌^{ぜつ}」て姓なの。珍しいでしょ？」

「うん」

「した？」

「そう。――えつとね？舌家のご先祖様が書いた本によると、貴船の大神が「天下万民救済のために」天上界から貴船山中腹の鏡岩に御降臨された時、そのお供をしたのが、牛鬼だつてされてるのね？」

私も知ったときは驚いたけど、別な説では、この牛鬼が此花開耶姫だつていうのよ？あの美人で有名な神様が、何で鬼つていわれるのかわかんないけどね。

でね？ところが、この牛鬼、すっごいおしゃべりで、しゃべっちゃいけない神界の秘め事の一部始終を全部、暴露しちゃったのね？で、神様に怒られてその舌を八つ裂きにされて、貴船を追い出されたのよ。

追い出されてからは、近くで五鬼の首魁――まあ、グレちゃったんだけど、貴船が恋しくて、こっそり戻つて隠れてたらね？ま、可哀想だつてわけで、神様に罪を赦されたの」

「じゃ、結構イイ奴じゃん」

未亜は昔話を聞く子供のように熱心に清花の話に耳を傾けていた。
「まあ、許されてから、子孫にも、自分が何で貴船を追われたか戒めるために、舌って名乗ったそうよ？」

「なんか、ストレートな人たちだね？」

「舌というものは、善用すれば理を弁じ、物を格し、道を講じ、和を謀るが、もしこれを悪用すれば、初代の如く秘を発き、密を洩らし、神を犯し、聖を汚すといったな」

清花の父が初めて口を開いた。

「口は災いの元ってことだよな」

チラリと未亜を見る水瀬と、そつぽをむく未亜。

「私はいつも真実を追求しています！」

「口じゃ、なんとでも言えるもんね」

「うつつ……」

「まあまあ。で、舌家のご先祖様がさっきいった通り牛鬼ってわけ。でも、一応、神様なんだよ？」

「じゃ、清花ちゃんも神様の血を引いているんだ！すごい！」

「そ、そんなんじゃない……」

「でも、なんで神様の子孫なのに、牛鬼なんて怖い名前と呼ばれるの？」

「初代から数代、代を重ねるまで、確か四代目までかな？姿が、ね」

「？」

「——人じゃなくて、鬼だったって」

「ああ。それで」

「でもさ。水瀬君。ヘンだよ。それ」

「うん」頷く水瀬と、きよんとする清花。

「何が？」

「だってさ。よく考えて？牛鬼って、清花ちゃん達のご先祖様のことだよ？それが、なんで封印されているの？」

「そう。そこなんだよね。由来書きでもあればいいんだけど」
うーん。と、広げた巻物を前に考える水瀬。
見つめる巻物は、時の流れのせいで真つ黄色に変色していた。
ただ、端の部分に「牛鬼」とだけかろうじて判別できる墨の色し
が目立つ物は何もない。

「……鬼、か」

「土も木も我が大君の国なればいづくか鬼の栖なるらん。だがな」
腕を組んで思案にくれていた清花の父が、苦々しいという顔で水
瀬に言った。

「とにかく、水瀬君、この件、頼まれてもらえないか？」

「退治、でいいんですね？」

「ああ。報酬は……」

チラリと清花を見る父。

「——清花でいいか？」

「お父さん！」

第四話

「ふうん……」

深夜の深泥沼、沼のへりに立っているのは水瀬だった。

―魔素の反応からいっても、魔族に近いけど、でも、この反応は……。

目の前の真存在に対して、水瀬は正直、驚くと共に、軽い敬意すら感じていた。

ぐちゃ。

ぐちゃ。

ぐちゃ。

水瀬の耳に届くのは、先ほど彼女の餌食になった男の肉を喰らう音。

それ自体に水瀬は何の関心も感じていない。

この仲間はいつもそうだから。

ずるり

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

腑を喰らい、肉を噛みちぎるのは、全裸の女。
年の頃は水瀬と大して変わらないだろう。

いや、女の姿をしたバケモノというべきか。

女の額から突き出るもの

それは、角――

人ではあり得ない。

――どうしたものかな。

普通なら逃げ出したくなるような光景を目の当たりにしつつ、水瀬は判断に迷っていた。

できることなら殺したくない。

――よし

何故か水瀬は、踵を返して闇の中へと消えていった。

翌日 放課後

「水瀬君」

帰ろうとした皆瀬に声をかけてきたのは清花だった。

「どう?」

「うん。何とかなると思う。今日、深泥沼へ行って封印してみようと思っているんだ」

「え？」

きよとんとした顔の清花が言った。

「知らなかったの？」

「何を？」

「今朝から、警察の調査のために、あの沼、水が抜かれていくのよ？」

「へ？」

清花によると、沼は冬の時期には水が抜かれるそうだが、今回の殺人事件の証拠探しのため、時期を早めて今朝、水が抜かれたという。

「知らないと思うけど、元々、あの沼って、半分くらい人工池だから、抜こうと思えば抜けるのよ」

「——ごめん鳴瀬さん、僕、行かなきゃ」

水瀬が沼にたどり着いた時、すでに警察の鑑識が浅くなった沼に入って捜査している最中だった。

「あれ？」

水瀬は一瞬、昨日とは違って違った反応にとまどった。

魔素の反応が、ない。

つまり、あれは、沼にいない。

「……」

あたりを見回す。

目に付いたのは、人が余裕でくぐれるほど大きな水門。

「あの……すみません」

水門の側にいた警察官に水瀬は知らん顔で訊ねた。

「沼の水って、この水門を開いて抜いたんですか？」

「ああ。そうだよ？今朝方開いたんだけど、お嬢ちゃんならそのまま流されちまう位の勢いで水が出たよ？」

「この水って、どこに流れているんですか？」

「ああ。この水？運河だよ。市内を流れる運河」

「……」

「どうした？嬢ちゃん、顔が青いぞ？」

「あ、いつ、いえ。ありがとうございました」

――まずいことになった。

水瀬は慣れない手つきで携帯電話の短縮ボタンを押しながら自分の行動が軽率だったことを自覚していた。

「あれ」は深泥沼にいる。

深泥沼は孤立している。

だから、「あれ」が深泥沼から出ることはない。

そう考えていた。

それが覆った。

「あれ」はよりエサが多い場所へ移動した。

あれが狩りを始めると……。

その日の夜、水瀬の不安は的中することになる。

水瀬達の住む葉月市は、昔から水運の街として知られている。
市内の観光マップにも「運河の街」と歌われるほど、市内には運河が張り巡らされているが、今回、この水運の街故に危機が訪れることになる。

水瀬の不安は的中した。

「当たってうれいのは宝くじ」が持論の水瀬にとってこれは頭の痛い問題だった。

市内に縦横に張り巡らされた運河に運河に流れている下水道の総延長は数十キロでは決してきくはずがなく、目標とすべきがどこにいるのか、いくらなんでも把握することは困難を極める。とにかく出沒範囲の絞り出しに水瀬は苦心することになった。

そして、その間に犠牲者は確実に増えた。

橋の下をねぐらにする浮浪者

下水道の調査に入った作業員

探検ごっここと称して下水道に入り込んだ子供

警察に届けられただけで犠牲者は12名

そして、捜査のため下水道に入り込んだ警察官すら戻らなかった。

何かが水に潜んでいる――

口コミに噂が広まり、噂がパニックを呼ぶのに要した時間はわずか3日。

深泥沼の水が抜かれてから1週間がすぎていた。

「やっぱり、ダメかなあ」

清花の家でご飯を食べた後、意気消沈した清花のつぶやきをきいた水瀬が言った。

「ううん。大体の所、行動範囲が絞られてきたんだ」

「え？」

「未亜ちゃんに手伝ってもらってね。出沒した所っていうか、犠牲者が出た所を地図の上に書き出してもらったら——ほら」

水瀬がどこから取り出した地図を開く。

「市内の水路図だよ。未亜ちゃんがどこから仕入れてくれたかは知らないけど」

広げられた地図の上には、赤い印がいくつも書き込まれているが、一見しただけでは、水瀬が何が言いたいのかわからない。

「あのね？これは未亜ちゃんの大金星。アレが出る所は、一本に絞ることが出来るんだ」

「そう。気づいた時は驚いたんだけどさあ」

近頃は清花の家で夕食を食べるのを日課にしている未亜が自信満々に言った。

「ほら、この印の場所、必ずここから流れる水が入り込んでいるんだよ。で、反対に牛鬼は下水道の方には出ないんだよねえ」

未亜が「ここ」と指さしたのは

「ウチの湧水！？」

そう。水の発生場所は高田神社境内。

つまり、清花の家。

確かに、神社には古くから湧き水をたたえる小さな池がある。

水量はそれほどではないにしても、その水が深沼池を経て、運河

を通じて海へと流れている。

「そ。ここから流れる水は深沼を通じて、4号運河に流れている。で、犠牲者もこの4号運河とその支流を中心に発生している。その証拠に、水質汚染で問題になっているとなりの6号運河には、犠牲者いないでしょ？」

「つまり——」

ちらりと水瀬の横顔を見る清花は、水瀬の言葉を待った。

「4号運河を調べれば、アレに出会えるってこと」

「さすがだ！水瀬君！」

清花の父が興奮気味に言った。

「これでウチの不祥事も闇に消せるということか！」

「ま、そういうことですね」

「よし！では早急に頼むよ！でだ！」

父は水瀬の手を握りしめた。

「賞品は約束通りだから安心してくれ！いや、これはもう、あれだな！君の運命、そして責任なのだ！」

「し、賞品？責任？」

「そう！運命という責任をとる意味でも娘をよろしく頼む！事が終わった暁には、水瀬君、ぜひ！ぜひにも清花を君の嫁に——」

ガコンッ！！

室内に鈍い音が響く。

清花が飾ってあった招き猫を父の頭めがけて力任せに振り下ろしたからだ。

「お父さん！」

畳を突き破って床板にめり込んだ父をのしる清花。

「——ったく！娘をなんだと思っ——」

1時間後

公園。

運河を伝わる風がきもちいい。

近頃、気分転換に散歩するのが綾乃の日課になっていた。

トップアイドルがこんな時間に散歩だなんて知られれば騒ぎになるかも知れないが、夜風を身に纏う清々しさは、当分止められそうにない。

ピロロロッ

携帯電話が不意に呼び出し音を鳴らす。

未亜からだった。

「はい。瀬戸です」

『あ！綾乃ちゃん！？大変だよぉ！』

「何ですか？」

『清花ちゃんが水瀬君のお嫁さんになるんだよぉ！？』

「はぁ？」

『今、水瀬君が追いかけている事件、もうすぐ終わりそうなんだけどさ、それが終わったら、清花ちゃんのお父さんが「責任取って娘を嫁にもらってくれ」って！さっき大騒ぎになって』

「……」

メキメキメキ

『もしもし綾乃ちゃん？』

綾乃の頭の中では『綾乃ちゃんの妄想劇場』の幕が開いた。

清花の父「水瀬君！娘をよろしく頼む」

清花「悠理さん。幸せにしてくださいね」

水瀬「任せてくださいお父さん！お嬢さんは必ず幸せにしてみせます！」

場面が変わり二人の初夜

恥ずかしそうに布団に座る清花と、それを抱きしめる水瀬

清花「ふ、ふつつかものですが（赤面）」

…自主規制により削除…

事が進むに連れてプレイもエスカレートして、二人はいろんなトコであんなコトとかこんなコトとか……。

…自主規制により削除…

綾乃の頭の中では綾乃の知る限りの…自主規制…プレイが繰り返されていた。

『水瀬君も清花ちゃんも、ホントはまんざらじゃないんじゃない？』

グワシャッ！

派手な音がして携帯電話が粉々に壊れた。

というか、壊れたのは携帯電話ではなく、綾乃の方だったかもしれない。

トップアイドルがどこからどうやってこんな知識を仕入れたのか、本気で聞きたくなるほどの18禁な光景が未だに綾乃の頭の中で繰り返されていたのだから。

——許せない。

浮気して、いやがる女の子を縄で縛ったり、三。木馬に乗せたり、むりやり浣。したり、口ウソクをたらすなんて……。

恥ずかしいけど、そういうことは、私にしてくれればいいのに。

……ちがう。

そう。許せない。

これだ。

これは女の子として許すことが出来ない。

これは羽山君のいう「ヤキモチ」じゃない。

私はヤキモチなんて焼いていない。

焼いているのは「正義の憎悪」だ。

そう。

これは「正義」なんだ。

浮気は女の子への立派な犯罪行為。

だから、悠理君は女の子の敵。

そして、私の敵。

悠理君という浮気者には天誅を喰らわせる必要がある。

いや、私にはその義務がある。

浮気者には死を！

内心でそう叫んだ綾乃は、水瀬の家に向かって歩き始め、そして立ちふさがる者に止められた。

立ちふさがる者。

それは、

牛鬼――。

運河からあがってきたのだろう牛鬼だったが、これはもう、牛鬼の不運としか言いようがない。

牛鬼自身が目の前のエサの変貌ぶりに引いていた。

「ギ……」

「……」

逆立つ髪と突き刺すような視線に凍り付く牛鬼。

もし、牛鬼がそうでなければ、もしかしたら牛鬼は生き残れたかも知れない。多分。

「――わざわざ死にきたのですか？ 鳴瀬さん」

そう。

牛鬼の顔は清花にそっくりだった。

遠目から見れば、全裸の清花が立っているようにしか見えなかったろう。

怒りに我を忘れかけている綾乃にとって、それは大した問題ではない。

清花に似ている。

それだけで万死に値する罪なのだから。

「いい度胸です」

その筋の方も黙って死んだふりするだろうドスの効いた声に、牛鬼は身動き一つとれなかった。

「しかも全裸とは……私に対する挑戦ですか？」

「ぎ、ぎい……？」

脂汗を流す牛鬼。

「そんなみだらな格好で街を歩くのも、悠理君の趣味だというのですね？悠理君に調教されたと、そして、自分の方が私より胸が大きいと自慢しにきたのですね！？」

「ぎ……ぎいっ……！」

ガッ

綾乃は、逃げだそうとした牛鬼の首を、あろうことかわしづかみにした。

メリメリ……

「ギッ、ギイイイイイイツ……！」

いつの間にか伸びた爪が牛鬼の喉にめり込んでいく。

「——その無駄な度胸に敬意を表して、楽にしてあげます。

安心してください。お葬式では、クラス代表として心にもない弔辞くらい読んであげますから」

「ギイイイイイ」

「さようなら、鳴瀬さん」

公園に鈍い音が響き渡った。

それから１０分後

——鬼女が出た。

——般若が道を歩いていた。

警察にこういう１１０番通報が２０件以上寄せられ、警視庁騎士警備部が出動する騒ぎが起きている中、自宅の布団の中で眠りにつかうとしていた水瀬は、室内に響き渡った警告音にたたき起こされ

た。

セキュリティが不審者を感知したらしい。

——どうせどこかの不良達だろう。

オバケ山探検に来たバカ程度に考えていた水瀬だったが、事態がそんなに甘くないことを知るのに時間はかからなかった。

セキュリティシステムは不審者への警告を発しているのではない。警告はシステムそのものが攻撃を受けていることを知らせてきたのだ。

特殊部隊向けに設置された爆発物、火器をものともせずシステムを破壊しつつこちらに進む者がいる。

手並みは素人だが、破壊力はデタラメなまでにすごい。

——誰だ？

生き残ったセキュリティカメラが映し出した光景を見た途端、水瀬の心臓は、どこかへ逃亡してしまった。

セキュリティシステムが映し出した映像には、素手で対人用ガドリング砲の砲身をひねり潰す女の姿が映し出されていた。

逆立った髪、怒りに燃える目、視覚効果が入れば確実に角と牙が生えている。

水瀬ですら、これを夜叉と般若とどちらに区分けすべきか本気で迷った。

それほど凄まじい形相でこちらに進んでくる者——。

それは、綾乃だった。

数分後、水瀬の寝室の障子が蹴破られ――

血の宴が始まった。

関係者が現場に到着した時、すでにセキュリティシステムは完膚無きまでに破壊されており、家も建材がほとんど吹き飛ばされ、ころうじて礎石が残るだけだったという。

搜索開始から半日たってガレキの下から発見された水瀬は、心身共に致命的なダメージを負っていたが、治療にあたった魔導師全員の共通した疑問は「なぜ生きているのか、それがわからない」という言葉でその程度が知れるだろう。

水瀬に「天誅」を喰らわせたことで満足したのだろう、綾乃は全身に返り血を浴びたまま自宅に戻り、朝歸りの娘を出迎えた由里香を失神させ、昭博の腰を抜かしてのけた。

数日後、水瀬の家の大家である宮内省から、被害に関する数億円

にも及ぶ請求書がプロダクション経由で送りつけられてきた。

そして、刑事事件としての立件すらちらつかせる宮内省にプロダクションが屈する形で綾乃に関するある契約が成立した。

瀬戸綾乃が近衛兵団のイメージキャラクターを、向こう10年間ノーギャラで「快く」引き受けたことが芸能誌をにぎわせるのは、それから数日後のことである。

第四話（後書き）

……かくして、綾乃は水瀬への嫉妬を正当化する理論を身につけたのでした。

という感じでしょうか？

本当にシリーズ最初期の作品でした。今見るとなんだか懐かしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6624b/>

何が原因！？

2010年10月8日13時49分発行